

降りそそぐ雨に消さるる峰に似ず青くの
これるあぢさゐの花

比丘尼より幼き時の嗣信を聴く醫王寺に
鶯の啼く(以下飯坂温泉にて)

鵬の城跡めぐる水を聴きはるかに望む靈
山の端はし

夜の汽車避けよと母の文にいふ日の放送
に水害を聴く(以下阪神地方の水害の折に)

たらちねの母のふみ故まつ人のあれど約
より遅れてぞゆく

冒されし山雨にあれいと易くうち駈ちた
り人聞のもの

藁屋あり擔軍おへる人まへに立つ亡びし
國は想はぬさまに(朝鮮にて)

雲亂れ吹雪する野のさましたるおほ空あ
ふぎ黄海を越ゆ(以下海上にて)

黄海に浪あらくたち嶋の灯を消しつとも
しつする船にぬ

潮風を帆に截る船の灯をおけば夕映の雲
きえんとすらん

おほいなる夕映の海かがやけばもだしが
たかりやまと心に

早鞆の瀬戸を前にし嘆けるは古ならず今
の世のこと

早鞆の瀬戸ゆく舟をあなかしこ壽永の帝
のまもりたまへり

早吸の瀬戸もやの立ち山の端にたそがれ
の月しろく浮く時

飛び魚の落ちてつくれる輪に隣り波のう
かぶるしろき月かな

傾きし月のつくれる銀の川海に流れてわ
が船のゆく

東海はくれなるにそみ夕月は波に千絲の
しろがねをひく

夕映し船くれなるの海をゆく希望の道と
いふならねども

黯^{くろ}みてとほく擴がるおほ海のもなかに月
はしろく漂ふ

重成の碑^{いしづみ}を讀むわが憂ひ古ならぬいまの
世思ひ(大阪にて)

秋のあめ木肌に沁まん殉難の少年の塚な
らびたる山(以下會津飯盛山にて)

君侯にかはり遷れるみ世のため命ささげ
し人あるを知れ

鶴が城御座所の跡と人のいふ^{いしづみ}礎^{いしづみ}のこり梅
の花さく(會津鶴が城跡にて)

爐に倚れば故里こひし母戀し松の葉青し
湯田の湯の宿(以下湯田温泉にて)

尋麻疹かゆきもしばし忘られて心やすけ
き山の湯の宿

瀬をはやみ波船をうちしろく散りしぶき
にぬるる巖の苔かな(以下保津川にて)

若葉して光る緑の山裾に保津川波のたち
さわぐ見ゆ

若葉する山の鶯聴きながらわが船すすみ
湍つ瀬を越す

赤松の幹にならびて紫に咲きほこりたる
山躑躅あり

旅にしてわが思ひいづ病む妻に書くべか
りしを落しつる文

閒吟篇

聖 戦

尊けれ四億の民を西歐の枷かぎより放つみ戦
なれば

つはものはまた骨となる身きをばねがふ
ならねど禱る和平を

隣して國戦ふもはかなけれさあれ赤匪は
討たであらんや

傷つきし白衣の兵士汽車にあり心に騰り
揖してぞ過ぐ

武漢落ち海南島を扼せども東亞の和平い
つ我れら見ん

その山河かよひ書く文字おなじ民なあんぎ
そい護れやひんがしの國

み空ゆく飛行機を亡きわが子にもよそへ
て仰ぐ人もこそあれ

一撃に醜の夷をひしがばやこのままゆか
ば國滅びてん

しきしまのやまとの神のみち光れ物の文
化のほろびゆく時

世に禱る

闇の値と人などがめそ幼なかるものの生
命の断ちがたきため

憎むべき彼の生活断面をのみ見るべしや
省みもせで

耕すを得ずシャベルなく圃の値をいへば
ふたしめ納屋より出す

一九六

ものたらず足らざるは民しのぶべし忍ぶ
べからず世の紊るるは

物たらず生産擴充意のごとくならねど責
に任じ果つべし

閒 想

あふことのささやけきにも涙おつ病むこ
とよわき心かなこれ

思ふこと成らざる日にははかなくも世に
敗れたる人をあはれむ

一九七

ささやけきことにも心ひかれつつ零れや
すかるわが涙かな

一九八

戒めし父思慮あさく若き子の縊れ死にす
といふにわれ泣く

逆はず波の瀬にのる鷗ともいふべき人の
時めく世かな

いつくしむ心にひかれ惱むなり正しきも
のの捨てがたき人

憤りふくめば心あらぶれてありのすさび
に後を思はず

念じつつ珠數を手にして家を出づ怒り易
かる己が性ゆゑ

一九九

夏の雲たかきに仰ぎ藤椅子に倚りて思ふ
は國策のはし

五十二の年をはらんとしてあふぐ陽のあ
かやかに美はしきかな

嘗るもあり隱言を放つあり期することな
り動ぜざれども

ましぐらに信ずる道を行かずしていかに
生くべき激動の中

ただ獨りわれは進まんみな人の對蹠線上
ひれてゆく日も

悲しみのまじるにあらず感激の極みに落
ちし涙と知りぬ

劫初より文化の流れたうたうと流れてや
まづ泡は人なり

睡蓮を観て思へるは花ならでふと危ふか
る人の爲すこと

放送す千里の外にわが聲を聞きたまふべ
き母を思ひて

憤りうちに鬱してしづ心なき朝夕に観る
や世のさま

まごころのこもる言葉のはしはしに落つ
る涙の尊かりける

吾が言葉はげしけれどもその中に偽りあ
りと遂に思はず

母と語る

二〇四

音もなく松にふりつむ雪を見て母と語ればわが心たる

湯の音の爐にたぎるをば聴きながら窓にぞかろく降れる淡雪

おん齡かさなることのめでたけれ母老いらくのおん境にて

み社の丹塗にらの橋のしたに鳴る水を聴きつ
つ母の手をとる

すすきの穂かれたるままに招くなり幼かりつる日の思ひ出を

二〇五

亞麻色にいまは枯れたる穂芒の山やはら
かに冬の日をおく

われ涙もろくなりぬとしろき頬に落つる
涙をぬぐひたまへり

はらはらと降る淡雪を手にうけぬ古里の
ものみななつかしく

冬がれの木の間にほそき月かかり淡く照
らせり穂芒の道

落つる日の紅べにちからなき冬にして野をや
く煙そらに這ふかな

日の落ちて枯れし芒のなほ光りかぐるめ
る水静かなるかな

父として

戒めし後に亂るる思ひかな爲さんすべなし子の涙見て

戒めん心なれども鋭さの過ぎて詞のたらざりしかな

戒を素直にうけて子は常の軽き心にある
あはれなり

叱りつる子をひたぶるにいとしめり似る
年ごろの子を外に見て

戒めて自ら耻ぢぬわれの持つ同じ性をも
享けし子故に

はらはらと指より落つる子の泪見つつ言
葉の断ちがたき時

二一〇

母 病 む

飛報きて母の病をわれにつぐ心おちるず
神に詣でん

病む母を騰る社の石に散る夏のはじめの
しろき花びら

二一一

なげかじとかなふまじきを思ひつつ遠く
思ひぬ母のみやまひ

三三

病む母をたづぬる國の曉は五月も寒し霧
しづくして

犬躰躑さく山の朝きりに明け會津の平車
窓より入る

歸るなと文せしめたる母なれど近く坐し
たるわれをよるこぶ

瘠せたまひ病のところに母の髪みだれてお
ん眼われにそそがる

三三

挽歌

二四

ふるさとのみ病おもき伯父ぎみを訪ふわ
が道に降る時雨かな(以下亡き伯父ぎみを悼みて)
み胸にはなほ暖かさのこれどもみ心遠し
すでに世の外

御壺に納むる骨のましろきに安けきのち
をおもほゆるかな

形あるものもろともにその憂けむりとな
りてあとかたもなし

曇る日はおほ海原も光なしそのごと愁身うれへ
をかすかな

二五

若くして右臂^{ひだり}うしなひ彩管に使命をはた
し友うせにけり(以下故江崎義郎畫伯を悼みて)

右なくて彩管とりし人も逝くべエトオベ
ンにもたぐふべき友

逝きしのち思ふは君のあゆみつる茨のみ
ちと丹青の道

右なくて左に把^とりし彩管がなしつる繪に
も残る思ひ出

職あるかかく問ひつればひたぶるに描か
んのみと答へし友よ

船の室われと隣りし亡き友は骨としなり
て黃海を越ゆ(以下故平山敬登君を悼みて)

淋しくも光る酒かな亡き友のみ靈のまへ
にそなへられつつ

二二八

燭の火の揺れて移れる時のまに君は久遠
の路あゆみゆく(以下故西田猪之輔大人を悼みて)

金銀の供養の華の中にあり寂しく笑める
君の繪姿

君かつて杖もてたたき示したる所に骨を
分ち埋めぬ(以下故林權助男の分骨式に臨みて)

大人が策を獻ぜし滿洲も分骨をうく言に
したがひ

想望

三〇

ひと遠く船にて去るといふあした満洲の
山ゆきしろくおく

冷やかに笑みてゆきしや涙して去りしや
われにそむきつる人

幻はわれとあれども人すでにこよひ船に
て黄海を越ゆ

忘れえばやすからましをあぢきなく見が
たき人をわが想ふかな

月の影おぼろに霞みまた人もあらで淋し
き春の宵かな

三一

病む人を遠く想へば風たちて胡藤アガシヤの花し
ろく散るなり

二三二

師の病つげて越武の書ける文つち降るあ
した鞍山につく

子の嫁ぐ

現世の幸をのみかは子の爲めにわれも神
父とともに禱りつ

わが娘神の子となりわが家の子ならずな
りて教會を出づ

二三三

寄 款

君かつて大江わたり探りつるシベリヤ望
み眉あがらまし(以下鈴木重治大人へ、大人は曾て
日露の役浦鹽要塞を探りて捕はる)

龍水をわたり野に伏し探りつる君に待つ
日のなしといはめや

シベリヤを探りて君は歸り來し迎へつる
日のわれ若かりし

わが卓にわが手を待てる書類おほしうち
捨てて讀む友の歌集(以下紙錢を焼くの著者
山城正忠大人へ)

南みなみの海に島あり敷島の道きみありてここ
に興れり

思ふべき正忠戀に泣くとのみ師にささげ
たる歌の光るを

三三六

母として詠じたまへるおん歌のいみじか
りけれ海嘯の中(蘆屋よりの著者丹羽安喜子夫人へ)

冷燭の影にうつるはみ娘の見がたき眸
るおん母(冷燭の著者内野辨子夫人へ)

友のうた手にしてしのぶ師もいまし鶺鴒
の箒見し夕など(鶺鴒の著者高橋英子刀自へ)

受難の日君のよみつる歌に見る子ゆゑに
泣ける同じ心を(以下紅沙集の著者山田知子夫人へ)

夫人なほをとめ心に詠みたまふ歌のあえ
かに光りこそすれ

三三七

紫の匂ふ牡丹もうす紅べににさく秋草も友の

姿ぞ(秋の浅紅の著者辻和歌子夫人へ)

命なきみむすめに母うすけはひしていと

清く眠れと禱る(以下瑠璃の編者藤岡長和大人へ)

あひ見ずて遺されし句と水莖のあとにし
のぶはすでに亡き後

珠なれど冷たき輪にはあらずして涙と歌

をこの君つづる(以下涙の念珠の著者堀口大學大人へ)

手にするは涙の念珠つらなるは師にたて

まつるみ歌四十五

八雲たつ出雲を神の巻に讀みいままた君

の歌に見るかな(水開くの著者三島祥道大人へ)

臨終にその約ありてあまれたる亡き人の

集 小 さ き 園 此 れ (以下小 さ き 園 の 著 者 故 近 江 蕪 子 嬢 へ)

天上の花を培ふ垂乳根の心づくしの小
さき園かな

苦しかるいまはの時もたらちねのみ言葉
まもるらうたき少女

「小 さ き 園」に「初めの薔薇」をのこしつる
人は歸らず花は咲けども

人のいふ美はしきにもたちこえて永遠とこしへ
なるは抱く幻

われもまた辿りゆかまし雲霧みなきえて
めでたき曉の道 (以下曉の道の著者鈴木吉良大人へ)

みやまひを海に養ひたまふ日の歌となり
つる夢にわれ泣く

二三二

世のさちのうすかりし君なぐさめし加茂
の川瀬は今も鳴れども(以下水の聲の著者湯浅延子嬢へ)

詠まれつる加茂川の水おと絶えず君なき
後に人を泣かしむ

棄てて世の顧みざりし人と物もちふるす
べを教へつる大人(以下故永井淑大人を偲びまつりて)

人いまだ知るべきかつて詈りし君の言行
尊かりしを

世の常の野生の藤の花ならで散らずとは
なる花とせん集(以下野生の藤の著者近江満子夫人へ)

二三三

うつろはぬ永遠とほのはな世よにありとせば紫
匂ふこの集もそれ

わが涙花をぬらしぬわが涙みそらの露の
たぐひならねど（濡るる花草の著者福田克子夫人へ）

ひとたびは枯れよとて抜き捨てし草すて
がたきかな棄てし心も（四十年前の著者小林政治大人へ）

あひ見ねどおなじ心におなじ夢見し友の
寄す旅の歌集（旅の歌カメラの著者岡崎正見大人へ）

漁村の暁

一三六

あかつきの雲うちなびく海原に船うた高く漁舟出づ

渤海の波うち寄する暁に磯の大船海士あしおろす

青き波とどろとどろと碎けつつこれより
海の夜の明けんとす

暁の灯影あかりうすらぐあら磯に浪光りつつ空
あけそめぬ

ひんがしの海より燃えて日の昇る二千六
百第一の春

一三七

辭 任

二三八

昭和十六年春、昭和製鋼所の任を辭して歸國せし前後に
詠める

雪の野の外に心の放たれて仰げばそらに
しろき雲飛ぶ

風落ちて枯れ木の枝も静かなり澄みわた
りたるおほ空のもと

落葉散り波立つ池のいつしかに木の葉し
づみて水静かなり

この木立野もはた山も見がたからん今日
を限りと立ちわかれば

二三九

人もはた草木ものびよこの山河はえ築あれと
ひた騰りつつ去る

1110

雑吟

自らの移し植ゑたる鉢の梅花すくなきも
心たらへり

清らにも初春のゆき鎌倉の山に降りつつ
紅き梅さく

1111

そらの花雪さへ降りて梅さけばここを地
上と思ひ得ぬかな

君が知る清き心によそへまし菊まどかに
も白くさくかな

あけぼのの空といふべき色をして氣高く
黄なり菊のひともと

よきをとめ君によるづの春秋をささげて
寄るはうるはしきかな(なかだちとなりける折)

舞姫のもゆる思ひを紅の鹿の子にしめし
胸のうちかな

時ながれ悲しみ移り淋しくも親しまれぬ
る大人の奥津城(以下奥謝野寛先生のおくつきに詣でて)

詩
集

二四四

悲しみのまじるなれども師のみ墓ふりゆ
くままにしたしまれぬる

亞細亞の黎明

(一)

黄河のほとり	國興り
文化燦たり	幾變化
治亂興亡	四千年
同じ國人	相搏ちし
史に觀る跡の	はかなけれ

(二)

日出づる海に
國興り

立てり聖なる
妖雲亂れ
史になき和平
光さやけし

(三)

長江遠く
千載^か涸れぬ
西の國人
吹く魔の笛に
長夜の夢の

み戦^{いくさ}に
散りて今
統一の
中華國

滔滔と
流域に
怪しくも
睡^{ねむ}らせる
跡あはれ

(四)

亂雲迷ふ
四億の民を
苦より放ちて
大稜威負ふ
光さやけし

曠原に
桎梏の
救はんと
國立てば
亞細亞洲

移民頌

(一)

草原萬里
民は移れり
高鳴る胸に
耕せ荒野
造れ初國

(二)

北の野に
匪は追はる
歟とりて
新らしく
搖ぎなく
野の涯に

遠く望めば

龍水流れ
露支鬭争の
今や蘇聯旗
トオチカに堅き

百年の
夢の跡
翻り
護あり

(三)

春丘陵に
草萌え花の
移れる民よ
烽火一度
祖國を護る

風立てば
咲くところ
拓きゆけ
揚りなば
盾と成り

(四)

風雲永遠とほに
誰か断つぜん
馬蹄の響
我が太刀風の
など侵おそさせん

亂れずと
國境に
起る時
立つところ
寸土の地

くろがねの歌

(一)

大稜おほみ威負いらひ
民の作れる
我が大君に
汗と涙と
滾たぎりて成れる

立つ國の
くろがねは
ささぐなる
燃ゆる血の
貢みつなれ

(二)

みいづ輝き

國は富み

民のなりはひ しげくして
彌榮えゆく おほ君の
國の礎 いや高く
築くは鐵の うへにこそ

製鋼所昭和の歌

(一)

廣袤萬里	滿蒙の
資源は深し	日滿の
經國の偉圖	茲に觀る
その建業の	成るところ
我等の昭和	製鋼所

(二)

爆破の響

轟けば

山裂け沙の
山容いつか
その爆力も
我等の昭和

煙たち
改まる
人に見る
製鋼所

(三)

高く聳ゆる
滾りつ燃ゆる
鐵石鎔かす
若き血潮と
我等の昭和

鎔鑛爐
灼熱の
不滅の火
ともにあり
製鋼所

(四)

眞紅に燃ゆる
鐵火の中に
成る分塊よ
鍛錬の道場
我等の昭和

あらがねの
その形かたち
壓延の
ここに見る
製鋼所

(五)

亞細亞の天地に
大業成りて
霸權を握り

鐵鋼の
東西の
友邦と

祖國日本の
我等の昭和

護りたれ
製鋼所

遙かに母校を憶ふ

清く流るる	廣瀬川
青葉明るし	愛宕山
険の陰に	護られて
同じ心に	偲ぶなる
五城樓下の	我が母校

寄青年賦詠

昭和製鋼所技術員養成所校歌

1160

(一)

青雲高く	氣をば負ひ
學びの庭に	作業所に
力の限り	いそしみて
雄雄しくあれよ	健男子
雄雄しく進め	健男子

(二)

黎明亞細亞に	一環と
成りて興れり	新天地
望む前途に	光あり
雄雄しく立てよ	健男子
雄雄しく進め	健男子

1161

昭和製鋼所滿人訓練所校歌

二六二

(一)

資源は深き
興る工業
教の庭に
我れ人生の

滿洲に
立國の
今學ぶ
あさぼらけ

(二)

春は短し
挽まず勵め

人の世は
寸陰を

惜みて研け
落葉の秋

その技術
遠からず

(三)

醒めよ四億の
東亞に興る
高き理想の
強き歩みを

五民族
新天地
聖業に
合せ行け

二六三

昭和製鋼所實科教習所校歌

(一)

おほ空高し

鞍山の

光さやけき

庭に立ち

知能の泉

いまくまん

花とこしへの

春ならず

(二)

噫青陽の

こころざし

進む行路に

試鍊あり

撓まらず倦まぬ
若き日に持つ

努力こそ
矜こなれ

(三)

理想は高き

星を射よ

技術の鍊磨

學業の

成りて寄與せん

意氣に燃ゆ

黎明亞細亞の

興隆に

鞍山の低唱

二六六

(一)

鐵の都よ

高爐の炎

思ひあがりて

燃ゆる火は

誰れに寄たる 想ひやら

誰れに捧げし 誠やら

(二)

鐵の都よ

むつみが池よ

紅の日傘の

蔭にとる

梶に眞夏の 水を切り

櫂に眞夏の 波光る

(三)

鐵の都よ

曠野のかなた

もゆる夕焼

二六七

紅む陽も

明日の望を 捨てずゆく
明日に願を かけてゆく

(四)

鐵の都よ

あの朝日山

紅葉ちりくる

ハイキング

森の胡藤

花を待ち

白楊の林

春を待つ

跋文

歌集「くろがね」は予の第五歌集である。

この歌集に収録した作歌は予の第四歌集「雲移る」以後のものであつて、昭和十二年春より同十六年春までの作歌である。

昭和十二年六月予は株式會社昭和製鋼所の社長として滿洲に赴任し、同十六年四月職を辭して歸國するまで滿洲に在住した。昭和製鋼所は滿洲鞍山にある製鐵會社であつて、採鑛、製鉄、製鋼などを業とする會社である。從て予の當

時の作歌も鐵に關はるものが多い。この歌集を「くろがね」と名づけた所以である。

この歌集を發刊するにあたつて、御病氣中の與謝野晶子先生より序歌を賜つたことはこの上もなき悦びである。悦びとまをすより折が折とて誠に恐縮に堪へぬところである。後進の末弟に對する恩師の濃かなる御熱情に對し、衷心より感謝の至情を披瀝してやまぬ。

装幀及び目次の題名「くろがね」を小杉放庵畫伯にお願いし得たのは交友箱崎正吉學兄の御紹介とお心盡しに依るものであつて、同畫伯の御芳情に對し、厚く御禮をまをしあ

ぐるとともに同學兄の友情に對し感謝してやまぬところである。

題簽の「鐵」は鈴木尅武兄の御盡力に依つて發見し得たものであつて、新詩社の同人高木藤太郎氏の令弟野口米次郎氏が米國より歸朝の直後、同氏邸に寄寓中、偶明治三十八年故與謝野寛先生より野口氏に送られた年賀狀の署名鐵幹の一字鐵を轉寫したものである。特に識して高木野口、鈴木の三君に對し感謝の意を表す。

表紙及び外箱の背文字中の著者名は、與謝野寛先生の御在世中著者に賜つた書簡宛名の文字を轉寫し、今は世にな

き恩師を偲びまつるよすがとしたものである。

四

昭和十七年一月三日戦捷のラヂオを聴きつつ
熱海延壽莊にて誌す

著者

昭和十七年四月一日印
昭和十七年四月五日發行

【定價金貳圓】

不許複製

東京市澁谷區伊達町七一
著作兼發行者 小日山直登

東京市神田區三崎町二ノ一
印刷所 株式會社 明章印刷所
印刷者 鈴木尠武

發行所 東京杉並區荻窪二ノ一四番
振替東京一一九、四番
冬柏發行所
配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

(四二五八二一號委員會協化文版出本日)

910
356

終

